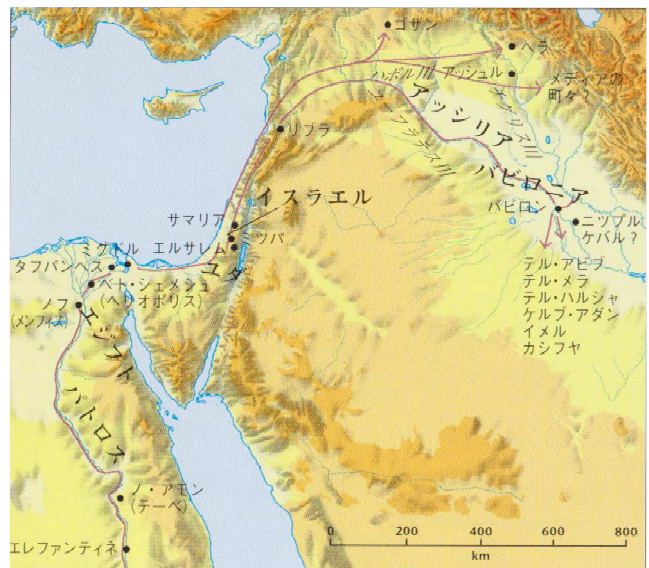




エゼキエル ミケランジェロ

捕囚となったイスラエルの民は、**ケバル川の河畔のテル・アビブに住んで(3章15節)**いたと記されています。最近の研究によれば、テル・アビブはユーフラテス河流域の古代の宗教的中心地ニップルの丘の町(首都バクダッドの南東160キロ)ではないかと言われています。最初のバビロン捕囚の人々は古代の宗教遺跡の傍で暮らしたのでしょう。祭司フジの子エゼキエル(おそらく30歳かもしれません)は、ヨヤキン王に仕える国の有力者の一人として、共に捕囚となりましたが、バビロンにおいても、ヨヤキン王の治世として年数を数えて、記しています。



この地でエゼキエルは驚くべき幻を見たのです。彼が天を仰いで見ていると、激しい風が吹き、大なる雲、火を発し、光を放ちながら近づいてくる、琥珀金の輝きのようものがありました。その輝きの中に、それぞれが四つの翼を持った四つの生き物がいて、生き物の顔の正面は人間、右は獅子、左は牛、後は鷲の顔をしていて、霊の行かせる所に進みました。傍らに目のついていて一つの車輪があり、その車輪の中にも車輪があり、霊が行かせる方向に進みました。その生き物の頭上に、水晶のように輝く大空のようなものが広がっていました。大空の上に、サファイヤのように見える王座の上に人間のように見える形をしたものがありました。それは火のように光を放ち、虹のようにも見えました。彼は畏れることなく見つめ続けて、細部までを記すことができました。エゼキエルはそれを見て、主の栄光の有様だと確信し、ひれ伏しました。



エゼキエルの幻視 ラファエル

